新成人者の感想文発表

ことしは、二百六十八名の人が成人の日を迎えました。

新しい社会の「おとな」たちに栄光が輝やくよう心からお祝い申し上げます。

町では、ことし、希望に満ちた成人の日を迎えられた人たちから「はたちをこう考える」という題で、感想文を募集しました。そして、二十五名の成人者からご応募をいただきました。審査は、種々多忙の折から役場内部だけで慎重に行ないましたが、その結果、本紙掲載の十編を入選としました。入選者には賞品を贈り惜しくも選にもれたかたがたには、記念品をさしあげました。

こう考える

より良い社会つくる努力を

上野（学生）　新井和子

社会は布地と同じように、縦糸と横糸とが相互に密接な関係を保ち、保たれつつ構成されている。織り初められた二十年の過去から、織り終わる未来まで努力して行くならば、まさにその布地は最高級の織物となるであろう。社会も同じである。

今思えば二十年の歳月は歩のように流れ去った。時にはゆるやかに、ある時は奔流のように…。しかし、そこに残されたものは、今日まで育ててくれた親、教え導いてくれた恩師、見守ってくれた社会への恩である。その恩返しもできぬうちに早や成人としてひとり立ちし社会の一員としての責任と権利のもと、おとなの社会へはいるわけである。今ここに私をはたちまで育ててくれた社会と両親たちに感謝したい。

未成年と言う温床から出る私たちには、暴風雨も氷雪も待ち構えているであろうし、時には小春びよりも、澄み切ったさわやかな秋日もあることでしょう。その中にあって先輩とごして、社会の秩序を守りつつ、より良き社会をつくり育成して行かなければならない。ひとりの怠惰は、織物の価値を半減させる。また社会はそのひとりでも見捨てるわけには行かない。そこに社会生活の苦悩と楽しみがあることを考えれば、私たちの責任は重大である。

法によって与えられた選挙権は主権者として、国政へ参与する権利であり、民法に規定された私たちは一人前の完全な行為能力のあるおとなとして取り扱われる。「はたち」の舞台に立たせられた私たちは、その存在をしっかりと見つめなくてはならない。

武家社会における元服は、男子の成人を意味しており、往時の徴兵検査は、男子の成人を意識させた。しかし、現在においては、男女とも自覚するなにものもない。ここに国民から祝福される「はたち」の成人式が、私たちの成人としての自覚する唯一のものであるだけに、「はたち」としての意味は深く、広く自己を内外に表明する意義ある手段である。この時間的な問題とともに、存在する世界の「はたち」を考えれば、私たちの意義は、アメリカ、西欧、アジヤ等「はたち」の男女たちとの協力と、和合によって更に広く、有意義な次代を生み出す原点としての発展を見ることでしょう。

こうした全人類の「はたち」が織りなす布地は、自然から人類を守る衣になるとともに、自然を開発する大きな原動力となるであろう。

私は私なりに「はたち」をこう考え、更に私たちは社会の一員であるとともに、そのひとりひとりが社会を構成していることを痛感し、自らを育てたいと思う。

審査を終えて

ことし成人の日を迎えることとなった二百六十八名の人たちが、このはたちという成人社会への第一歩の時点に立ってどんな感想をもち、考え、また夢みているか、これらをまとめた作文をお寄せくださるよう、昨年末にお願いしてみました。

その結果、二十五名のかたから、それぞれ個性味豊かなもの、若さにあふれるもの、成人社会の一員として人後におちないものなど新しいおとなにふさわしい作文をいただきました。

応募されなかった人たちも、その人なりの感想や、夢や、はたちを契機とした決意新たな何ものかをもっているはずです。しかし、文にまとめることは、多くの人がそうであるように日常疎遠がちなところから、つい煩わしかったものと思います。最も、自分が考えているものを自分が満足できるように話したり、文に表わしたりすることは、ひじようにむずかしいことです。従って、応募作品の中にはかなり優秀なものもありましたが、一般的に表現不足が多く目につきました。

これは、能力以前の問題として表現のむずかしさ、作文の機会の少ない生活に起因すると思われます。

この点で、入選の十編が全部優れていたとは申せません。入選作を十編という制約で審査してみたらこのような結果になったまでで選外作品にも、これらに負けないほどのものが数編ありました。

入選作品については、誤字脱字はもちろん、文章中不必要と思われる部分は、発表にあたって適宜手を加えました。この点、作者の承諾を得たいと思います。

また、入選十編の中では若干の優劣があるように感じられますが、募集の主旨からして、あえて順位をはぶきました。

今後ますます教養を高めて、すばらしい社会の一員となるよう切望します。

批判の目を失なわずに

秋畑（学生）　中野雅由

「人間は一生の間はいくたびも生まれ変わらねばならぬものである。母の胎から生まれた日を第一の誕生日とするならば青春は第二の誕生日である」評論家、亀井勝一郎氏は生前「現代青春論」の著中でこのように述べている。氏の指摘する第二の誕生日が即成人という意味ではないと思うが、今この第二の誕生日というものを比較的期間の長いものとしてみる場合、すなわち成人はこの誕生日の終結する時であると考えられると思う。こうした人生の新しい出発点に立つと、確かにこれで一人前の人間として扱われ、参政権も得られるのだ、などと思うと、なにかしら抱負めいたものをいだくのは、人間の常であろう。

だが、このような反面、今までは未成年者ということでとかく、社会的に重要な責任から都合よく避けられた(?)のであるが、これからは、そのような安易な行動はなすすべもないし、また、決して許されもしないのである。

こうしたことを考えると期待とも不安ともつかない複雑な気持ちが交錯するが、とにかく、与えられた権利は十分に活用し、それに伴なう義務と責任をできるだけ果たし、権利と義務とのギャップをなくしたいと思います。

まず、われわれが最初に参政権を行使すべく参議院選挙も目前にひかえている。地理的な関係などという二義的なものに拘でいせず、視野を広く持って投票にのぞみたい。

自分の投ずる人を政党主体に選ぼうが、個人の人格主体に選ぼうが、そこに他人からの干渉だけは入れたくないものである。たしかに、一個人の力はささいなものであるけれども、だからといって、自分ひとりぐらい投票しなくても大局に変わりないなどと安易に考え、その権利を放棄することはみすみす、反民主々義的な要素の介入を助長しているようなものである。

そしてまた、今日の日本の平和は偽りの平和であるといったら過言であろうか？

昨年から続いている国会の黒い霧はなかなか晴れそうにないし、またベトナム戦争に対する政府与党の態度や国民の期待を裏切るような言動の数々には自分の目や耳を疑いたくなるくらいである。少々理想論めいたことになるが、これらを改善するのは、われわれひとりひとりにかかっているということを再確認されたい。

それについても、世の中には与えられた政治、その時の風潮に盲目的に従っていくだけの人がなんと多いか、ということである。やがてはこれらの人は、自己固有の判断力を失ってしまう。このような人間にならないためにも、われわれ若者は日常の茶飯事にさえもきびしく批判の目を向けるような批判精神を持つ、すなわちそれには、ひとりひとりがイデオロギーを持つことが必要であると思われる。

やりがいのある農業を

秋畑（農業）　中野惣一

昭和二十二年終戦っ子として生まれ、小学校、中学校を卒業して、無事私たちは成人式を迎えるわけですが私の胸の中には不安と希望がある。

はたしてみんなに認められるような成人になれるのかどうか不安でいっぱいだ　しかし、反面希望がある。

思いきり自分の進むべき、道を進んでみよう。私は一生、農業をやらなければならない。いややるのだ。やりがいのある農業をやろう。回わりの人たちが見て楽しくやっているんだなあと思うような、そして誰が見ても農業とは本当にいいなあと思い感じるよ　な農業をやりたいと思う。

現在では、たしかに農業をきらい都会に行ってしまう傾向にある。しかし、いつか必ず、いや明日にでも、みんなが心から農業に目を向けてくれるよう努力したい。それには、農業をやっている人が力を合せてやらなければならないと思う。

私自身、今まではあまり落ち着かず、何事においても割合無関心でいたが、今後はなるべく落ち着くよう心がけ、何事にも目を通し、少しでも世のためになるような態度で生活して行きたいと思う。

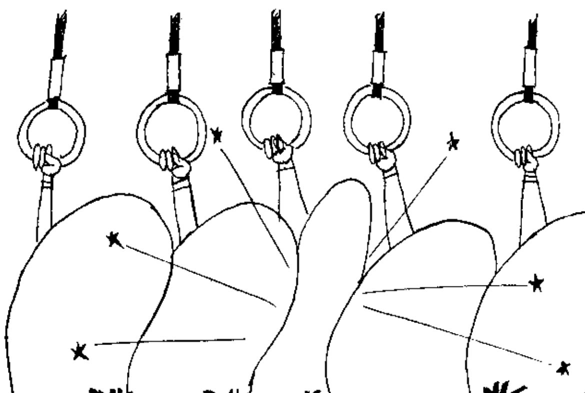
そして、自分の考えを押し進めるとともに、相手の考えもよく聞いて、大いに自分の体に吸収し、二十才を第二の出発点としたいと思う。

また物事を一つ一つ真剣に考え、生れてから今までのいろいろ自分のやってきたことを反省し、今後若いファイトを大いに燃やし、誰が見ても正しいと思ってくれるような生き方を心がけたい

おとなと言うことを大いに自覚し、あくまであやまちのないような毎日を送りたいと思う。私たちもおとなとして認められるのかと思うと、心の底から責任感がわいてきます。そして、責任感を感じるのと同時に、心から成人としての喜びを味わい、それに負けないような、りっぱな人間になり　と思います。

誘惑に押しつぶされない
自分の考えを持とう

森吉正照



意欲的な人間になること

秋畑（学生）　斉藤隆之

はたち、成人…この言葉を耳にすると、いつもは楽観的な自分も、何か目に見えないものに束縛されているような重圧感が、いつの間にか特権意識を片すみに追いつめてしまうことに気づきます。いたずらに歳月だけが流れ、精神的にすっかり取り残されてしまったと言う不安、焦燥からかもしれません。

ぼくたちは今までおとなという世界を、私たちとは遠くかけ離れた複雑な且つ少し次元の高い世界であるとして見つめてきました。そしてそれは複雑な社会を義理人情をわきまえ、たくましい生活力を持って生き抜く者として、また一面では地位、名誉、私利私欲にはしる「適当な人」として映じていました。しかしそう言う自分も今、いつの間にかこのおとなと言う範囲に一歩足を踏み入れてしまいました。でもまだほんの名目的な成人であり、未成年から成年への過渡期なのです。ですから両者の要素を少しながらも含んでいる健全なる人間形成実現に最も努力を必要とされるたいせつな時点であると言えます。

それだけに、成人となったからと言って急に心身や生活態度に特別な変化が起るわけではなく、また容易に起せるものではありませんが、人生の新たなスタートとして、一主体的人間として何をなすべきか、何をなさねばならないかと大きな期待に胸をふくらませているとともに、強い責任感と自覚の必要性を感じさせられます。おとなの仲間入りをするにあたり抱負と言うか心構えと言ったものとしてまず主体性のある人間としてあらゆる対象に対して意欲、熱情を持って取り組んで行きたいと思っています。

「諸君の国が諸君のために何をなし得るかを問いたもうな。諸君が諸君の国のために何をなしうるかを問いたまえ」（ケネディー）、少し誇大な引用かも知れませんが、現在のような緊迫した国際情勢下や複雑な社会構成の下ではこれくらいの個人の前向きな姿勢、物事に対処する態度、野望と言うものが必要と思われます。一握りに過ぎない一個人が国政に干渉したところで、しかたがない等と考えますが、個人が主体的な意欲と関心を持って、政治や社会のあり方について善意的に努力することが、民意と指導層の一致した真の民主的社会実現への必す条件とも言えるでしょう。このことはまた、国民の権利であり、国民としての義務でもあるのです。

その次に「今どきの若い者」「昔者」と言う言葉で表現される歴史観の違いからくる思想的な断層と対立関係ですこのジレンマをいかに効果的に吸収し、抜けだすことができるかと言うことも、われわれの世代に課せられた大きな使命ではないかと思われます。そしてさらに幸か不幸かベビーブームと言われる進学や就職その他あらゆる面で過激な競争を余儀なくされる時代に生れたぼくたちにとって、それは一生決しておろすことを許されない重荷であって、人一倍の努力が必要とされます。その仲間の人たちに取り残されないためにも、また、社会人として、一億分の一の役割りをりっぱに果たすためにもぼくは自他ともに許す健全なる人間となるよう、若さのエネルギーをもって、最大限努力して行きたいと思っています。

門出
—成人への門出にあたり清き一票を忘れまい—
アヤタ・クニオ